



岡山県におけるブドウ病虫害防除暦作成の考え方

岡山県農林水産総合センター 農業研究所 やくしじ 薬師寺 すぐる 賢・亭坂 おさか 大樹* だいき

はじめに

岡山県における2024年産のブドウ栽培面積は1,240 ha、収穫量は14,300 tであり、面積は全国5位、収穫量は全国3位である（農林水産省作物統計調査、2024）。主力品種は、‘ピオーネ’、岡山県が育成した‘オーロラブラック’、全国シェア9割以上を生産している‘マスカット・オブ・アレキサンドリア’、そして、近年栽培面積が急増している‘シャインマスカット’である。

本県にブドウが導入されたのは1877年（明治10年）で、当時はアメリカブドウの‘カトーバ’などが栽培された。その後、1935～45年（昭和10～20年）に‘カトーバ’は‘キャンベル’や‘デラウェア’に代わった。1967年（昭和42年）ごろには、‘デラウェア’に代わる品種として‘ピオーネ’が導入されたが、結実の不安定さが問題となり、栽培面積はすぐには増加しなかった。しかし、ホルモン処理や房づくりなどの試験を繰り返し、安定生産が可能となると、1980年代（昭和55年）から県の推進もあり、栽培面積が増加し、現在は全国1位の生産量となっている。また、1886年（明治19年）にガラス室での‘マスカット・オブ・アレキサンドリア’の栽培が始まった。‘マスカット・オブ・アレキサンドリア’の栽培は、現在まで途切れることなく続いており、本県を代表する品種となっている。

本県の栽培形式は施設栽培と露地栽培があり、施設栽培では主に‘マスカット・オブ・アレキサンドリア’や‘シャインマスカット’が栽培されており、早い作型では12月後半から加温が始まり、5月ごろから収穫となる。一方で、本県のブドウ生産の大部分を占める露地栽培は、一般的に雨除けビニルを被覆した栽培（以下、簡易被覆栽培）（図-1）が普及し、8月後半ごろから収穫となる。このように、ブドウの栽培および収穫時期は作型に



図-1 本県のブドウ栽培の大部分を占める簡易被覆栽培

よって大きく異なり、時期や作型によって病虫害の発生状況も異なる。

果樹の安定生産のためには、各作型に合わせた病虫害管理が必要である。本県では、全農おかやまが中心となって病虫害の作業防除暦（以下、防除暦）の作成が行われており、岡山県農林水産総合センター農業研究所は病虫害に対する既存農薬の有効性、気候変動などによる防除適期の変化、新規農薬の防除効果および化学農薬以外による防除方法などについて、アドバイザーとして協力している。作成された防除暦は、そのまま活用されることもあれば、各JAやJAの支店によって地域の特色などを反映し、アレンジを加えた暦になることもある。本稿では、岡山県における防除暦作成の考え方や防除暦を活用する上でのポイントについて紹介する。

I 対象病虫害

本県のブドウ栽培は、県南部～北部にかけて広範囲で行われていることから、地域によって気象条件が大きく異なる。また、前述したように複数の作型や品種での栽培が行われていることから、病虫害の発生様相は、産地や園地ごとに違いが見られる。また、近年の異常気象によって、病虫害の発生量の年次変動が大きくなっている。

主な病害としては、べと病、褐斑病、晩腐病、灰色かび病、うどんこ病、黒とう病、白腐病、さび病、すす点病

The Concept of Grape Pest Control Program in Okayama Prefecture. By Suguru YAKUSHIJI and Daiki OSAKA

（キーワード：岡山県、ブドウ、病虫害、防除暦、薬剤散布）

*現所属：岡山県美作県民局 農林水産事業部 勝英農業普及指導センター